

# 助産教育とほめ言葉

富安 俊子<sup>1)</sup>

Toshiko Tomiyasu<sup>1)</sup>

## I. はじめに

看護や助産教育において、高い看護実践能力の育成は重要な課題である。臨床の場では、人々の高い健康への志向と価値観の多様化に伴う多様なニーズに対応できる力、すなわち、その時・その場を得た独創的ともいえる看護実践力、「看護を創造する力」の育成が求められている<sup>1)</sup>。弓野<sup>3)</sup>は、教育には、「ほめ方」がカギになると述べている。助産教育においても、「ほめる」ということは、魅力ある個性や創造性を備えた助産師を育成するうえで、重要な教育の1つであると考ええる。また、青木<sup>2)</sup>は、ある場面や目的に応じて、最も適切な「ほめ」を用いることの重要性と、ほめることがポジティブな結果を生むという常套的な見識が繰り返されているという指摘もあるほどに、よいほめ方に関する情報は、育児や教育関連の書籍や雑誌に取り上げられていることを報告している。

弓野らは、A.B.スクローム<sup>4)</sup>の提唱した7つの個性的能力に着目した。その能力は、①アカデミックIQ (Academic intelligence quotient: 以下AIQと略す) ②創造性IQ (Creativity intelligence quotient: 以下CIQ) ③巧緻性IQ (Dexterity intelligence quotient: 以下DIQ) ④共感性IQ (Empathy intelligence quotient: 以下EIQ) ⑤判断力IQ (Judgment intelligence quotient: 以下JIQ) ⑥モチベーションIQ (Motivation intelligence quotient: 以下MIQ) ⑦パーソナリティIQ (Personality intelligence quotient: 以下PIQ) である。そして、弓野<sup>3)</sup>らは、ほとんどの子どもは、少なくとも1つの優れた能力があり、教師や親がそれらの能力をほめることにより、子どもに自信を与え個性や創造性を伸ばす可能性を増やすことが期待されると述べている。

筆者の今までの研究<sup>6)</sup>は、ほめ言葉について行ってきた。その研究では、看護学生や助産学生が、妊産褥婦をどのようにほめるのかという目的でほめ言葉の調査を行った。実習前に、ほめ言葉を考えていれば、実習中に、妊産褥婦に対して、円滑にほめ言葉を使え、産婦においては、スムーズな分娩ができるのではないかと考えている。ほめ言葉は、考えておくことが必要である。そこで、事前にはめ言葉

---

1) 姫路大学 看護学部

を考えておくことで、実習の現場で、妊産褥婦に対して円滑に使えるのではないかと考えている。

## Ⅱ. 当大学における助産教育

当大学学部の中での助産教育は、4年間の中で看護師と同時に助産師の国家試験受験資格を取得できる。学部の中の助産教育ということで、学生は、看護師の国家資格を持っているわけでもない。卒業時に、看護師国家試験と助産師国家試験の受験資格を取得できる。4年間の中で2つの国家資格が取得できるというメリットがあり、大学の魅力の1つともなっている。学生は大学3年生の時に、保健師助産師国家試験受験資格の選抜試験を受け、助産師を選択した学生が、助産師国家試験受験資格の科目の授業を受けることができる。

助産を選択した学生たちは、看護師国家試験のために、学習の経過過程である。そのため、母性や小児看護の学修が十分に習得できているかという点とそうとはかぎらない。また、母性看護学実習においては、出産数の減少から、妊産褥婦を複数の学生で受け持つため、母性看護技術や分娩見学もできていない状況である。そのような中で、助産を選択した学生<sup>5)</sup>は、分娩介助を10例程度実際に行うことが必要であり、そして、分娩介助に伴いそれに付随する様々な実践例えば、導尿、内診、妊娠期や産褥期の保健指導そして新生児の出生直後のケアなどを実際に実践していかなければならない。学生たちは、はじめての実践に戸惑うことも多くあるようである。学生からは、「領域別実習と違って、こんなに大変とは思わなかった」と口々に言っていた。実習が自分が思っているより大変であることを説明していても、なかなかどのように大変なのか具体的なイメージが持てないのかもしれない。そのため、今後は、どのような教育技術の方法を取れば、具体的なイメージができるのか検討していくことが必要であると考えられる。

助産を選択した学生たちは、分娩という経過時間に迫られ、即判断を求められる中で、対象者の状態などの情報から、アセスメント、診断、助産実践をしていくことが必要になる。助産の学生は、実際の分娩介助や保健指導を実践していくことが求められる。そのような中で、学生の助産師になりたいというやる気を伸ばしていき、適時に学生をほめ、その能力が発揮できるようにしていくことが重要である。しかし、適切な時に適切なほめ言葉をかけるのは難しい。また、ほめられた経験のないまたは少ない学生は、ほめられることを素直に受け入れることができないかもしれない。そしてそのような学生は、妊産褥婦をほめることはできにくのではないかと考えている。妊産褥婦をほめるには練習して、どのようにほめるのかを常に考えていかなければならないと思っている。実際にほめ言葉の調査<sup>6)</sup>において、ブレインライティング（以後BWと略す）前と後のほめ言葉の調査を実施した。その結果、BW技法を取り入れていくことで、ほめ言葉は増加することが明らかにしてきた。BW技法を取り入れることは、ほめ言葉を考えたり、増やしたり、また創造性を培うのに効果的であることが明らかにされている<sup>4)</sup>。実習に出る前には、BW技法を使用して授業を取り入れていく必要がある。BW技法を活用するには、5～6名の人数が必要になるので、学部の中での助産選択の学生にBW技法を活用することは、人数の面からできにくい状況である。BW技法を活用できないが、ほめることを考えることができるような授業を

構築していくことが大切であると考えている。子育て支援係において<sup>7)</sup>、ほめるつまり認められた子どもは、やる気を出すことにつながるといわれている。また、和田の著書<sup>8)</sup>の“ほめ言葉の力”ほめられて怒る人はいない、どんな人でも自分をほめてもらいたい、またありのままの自分をほめてくれる人に心を許すし、この人はいつも自分を見ていてくれると思うと、見栄や虚勢を張らなくてもいいのだと思う。ほめることの基本は、相手のいいところに気づいて、それを言葉にすること、そのことを伝えないことには、相手はほめられたとは思わない。

そこで、助産学生においては、妊娠褥婦をほめ、その人の持つ力を最大限に発揮させることが、いいお産につながり、いい子育てができるようになっていくと考える。そのためには、実習に行く前に、ほめ言葉を数多く持つことができるようにしていくことが必要になり、助産の学生に対して、すべての教員が授業や演習において、最も適切な時期に、適切に「ほめる」ようにしていく努力していくことが重要であると思っている。実際にほめることにより、ほめられた方は、嬉しくなり、ほんの一瞬で気持ちのいい時間が生まれてくる、そのような時間がいくつ重なれば、人間関係が楽になる。ほめるのは、何も特別な言葉でなく、大げさでなく、ありのままをほめることが大事であると和田<sup>8)</sup>は述べている。どんな人においても、いいところは隠れている。そのため、人をほめるには、相手をきちんと見ていくことから始まる。看護職は、相手を観察して情報を取っていく技術を培っていく。看護者は、人を見ることは当たり前のことである。ほめられれば、人はほめ返したくなる。そこに信頼関係も育っていく。

人をほめることをおおらかに考えるなら、共感ということになる。共感についても看護教育の基本であるといえる。共感や創造性は、看護をする者にとっては必要なことである。共感して、安堵してくれる人がいることは、間違いなく、自分の居場所ということになる。

### Ⅲ. 今後の課題

看護者は、個人で行うものでなく、チーム医療である。自分だけでよくなるのではなく、みんなでもよくなるということが、チームにとって大事であることは言うまでもない。ほめることは、人を気持ちよくさせる。とにかく相手を認めるということになる。どのような人の心の中にも、自分を認めてほしい気持ちがあるので、とにかくその人を認めることを忘れずにいることが大事である。みんなでもよくなるには、1人ひとりが自分を認めてもらい、同じチームのメンバーとして認め合うことである。そのためにはほめることでこの願望が満たさせる。ほめ言葉の数を、増やしていくBW技法を使っていくことも必要になるので、少ない人数の学生たちであっても、ほめ言葉を持ち、自分自身が、心から人を認めて、自然にほめ言葉が出るようになっていくようにできればと自然と信頼関係が構築されるのではないかと考えている。和田<sup>8)</sup>が述べるように、信頼の気持ち、親しみの感情、共感の言葉、感謝や励ましやいたわりの言葉をすべてほめ言葉としてとりあげることも必要なことであることを伝えていくことも必要となる。

## 引用・参考文献

- 1) 佐藤道子, 石塚淳子, 岸あゆみ, 他. 創造性を育成するための看護教育方法の開発 (その1), 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2007, No.15, 27-38
- 2) 青木直子. ほめるに関する心理学的研究の概観, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 2005, No.52, 123-133
- 3) 弓野健一, 山崎彩乃. 個性的能力と創造性に関する教師と大学生のほめ言葉の比較, 日本創造学会論文誌. 2010, Vol. 14, 69-86
- 4) A.B. スクローム著, 岩瀬章良編訳. 7つの能力で生きる力を育む, 京都, 北大路書房, 2000. 1-54, ISBN 4-7628-2192-6
- 5) 全国助産師教育協議会 [https://www.zenjomid.org/about/mbr\\_list](https://www.zenjomid.org/about/mbr_list) アクセス日2024.10.23
- 6) 富安俊子, 中村朋子, 天本都. 看護学生の母性看護学実習におけるほめ言葉の調査. 母性衛生2020 Vol. 4. No.60, 667-673
- 7) 地域子育て支援課 子育て支援係 <https://www.city.funabashi.lg.jp/kodomo/support/002/020210homeru.html> 参照日 2024.12.11
- 8) 和田秀樹: ほめ言葉の力 叱っても人は動かない. 第2版, 新講社, 東京, 2018.